

【発達障害のある児童・生徒に必要な指導・支援について考える】

～将来を見据えて、今、何をすべきなのか～

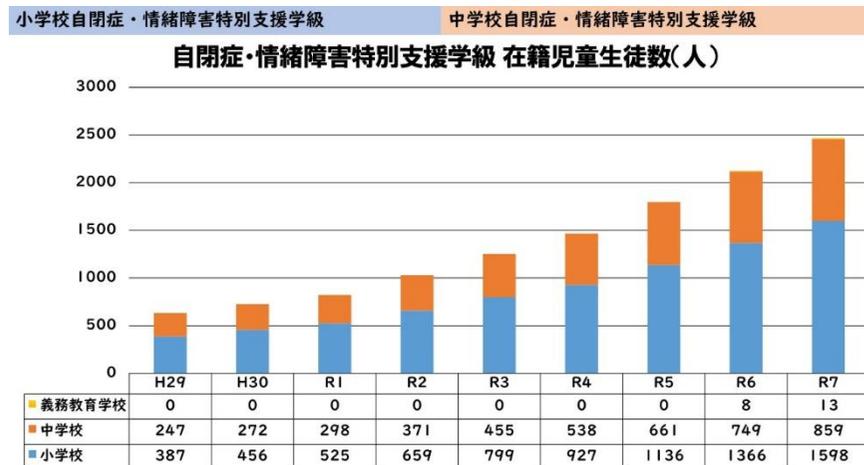
I 団体の概要

本会（略称：都情研）は東京都の特別支援教育の充実・発展に寄与することを目的とし、情緒障害教育、発達障害教育等に関する専門研修を通して、教職員の専門性向上を目指している。研修会は全都の公立幼・小・中学校教職員、区市町村教育委員会職員等が対象となる。具体的な研修会として、全都を5ブロックに分けて開催する地区ブロック研修（年間7回）と、全都を対象に開催する全体研修（年間4回）を設定している。また、情緒障害等通級指導学級時代から継続的に実態調査を実施し、それらを踏まえた上での実践的な研修となるよう努めている。

II 現状と課題

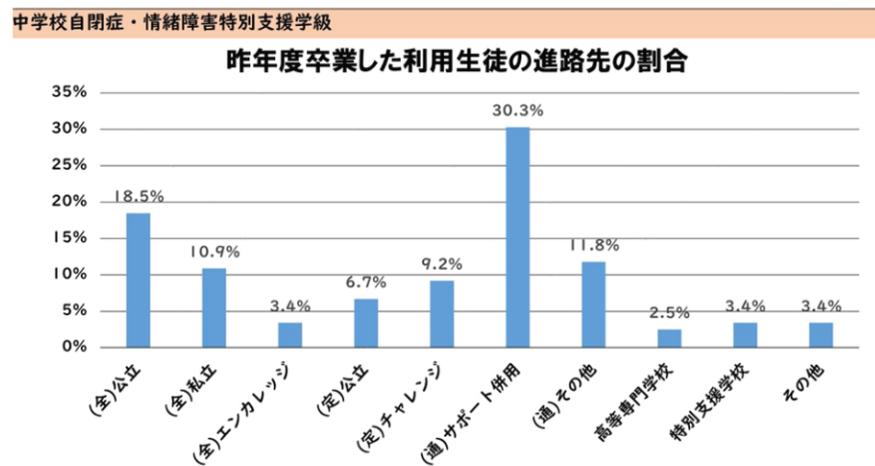
都内小・中学校全校に特別支援教室が設置され、利用者数が年々増加し、小学校約2万7千人、中学校約7千人、計約3万4千人となり、それに伴う教員数の増加（約3千人）も著しい。ガイドラインによる原則の指導期間（延長含む2年）が経過後、指導目標の見直し等により改めて指導を開始するケースが多い。発達障害に起因する問題は、容易に課題解決とはなりにくい実態が推測される。情緒障害育経験年数の浅い教員の割合が高く（小：約6割、中：約7割）担当教員の専門性の向上は必須である。また、自閉症・情緒障害特別支援学級を新たに設置する地区が増えると共に、利用児童・生徒数も急増している。縦のつながりを意識した、特別な場での効果的な指導が行われることを目指し、研修会の内容を設定し活動を進めている。

★ R07 都教委公立学校統計調査報告より



東京都教育委員会「令和7年度 公立学校統計調査報告」より

★令和7年度 実態調査より抜粋



Ⅲ 夏季研究大会・課題研修会【8月1日(金)・8月22日(金)開催】

夏季研究大会では午前中に鳥居深雪先生（神戸大学名誉教授）に「ASD等の児童・生徒の自己理解と援助要請力」をテーマに講演をしていただいた。様々な年代の指導に携わって来られた先生のお話は多くの示唆に富んだものであった。中でもセルフアドボカシーという言葉が印象に残ると共に、当事者の視点に立った指導・支援が重要である事を改めて共有できた。また、午後には都内4ブロックの代表による実践発表を行った。

課題研修会では、普段研修会の参加が難しい自閉症・情緒障害特別支援学級と中学校特別支援教室分科会を設定した。中学校の特別支援教室及び自閉症・情緒障害特別支援学級、その進路先である都立高校の取組を紹介してもらった後、グループ討議を行った。他地域、他校種の実態や、具体的な教材も含めた実践の交流が行われ、ニーズの高さを改めて認識することができた。

Ⅳ 秋季セミナー【11月11日(火)開催】

「通級指導のつながりを考える～小学校・中学校・都立高校で今、何を指導すべきか～」と題し、都情研の調査報告、基調講演として山本修司先生（教育庁指導部特別支援教育指導課統括指導主事）に都立高等学校における通級による指導についてお話しいただいた。その後、渡辺秀貴先生（元本会会長・創価大学教職大学院教授）をファシリテーターとして、都立高校、中学校、小学校の現場で実際に通級指導を担当する教員によるパネルディスカッションを行った。高校段階の通級指導の実際を知るとともに、今、目の前で我々が取り組んでいる子供たちへの指導との関係を整理する貴重な機会となった。その上で、目先の適応にとらわれず、将来を見据えた指導の大切さとともに、組織的に指導をつないでいくことの重要性と難しさ等を考えさせられる、多くの示唆に富んだ有意義な会となった。



Ⅴ 次年度への課題

今年度も、1年間の研修会への参加者が、のべ6500人を超えている現状があり、課題に対するニーズの大きさと本会への期待、役割を改めて実感している。今後も実践的な研修を取り入れつつ、全都の情緒障害教育のレベルアップに取り組んでいく必要がある。

<令和7年度連絡先>

団体名		東京都公立学校情緒障害教育研究会	
代表者	所属	江東区立第五砂町小学校	
	職 氏名	校長 小林 英忠	
	連絡先	03-3646-4474	
事務局	所属	立川市立第八小学校	
	職 氏名	指導教諭 上山 雅久	
	連絡先	042-536-0031	
団体ホームページ	URL	https://www.tojyoken.com	二次元コード